帰国報告

オランダ　アムステルダム日本人学校に勤務して

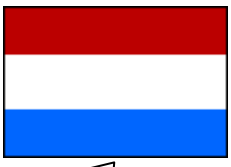
前　オランダ　アムステルダム日本人学校
現　上川郡東川町立東川第二小学校　教諭　岸　　政継
（派遣期間　平成 19～21 年度）

Ⅰ　オランダ王国について

1　国名、国旗、位置、人口などについて

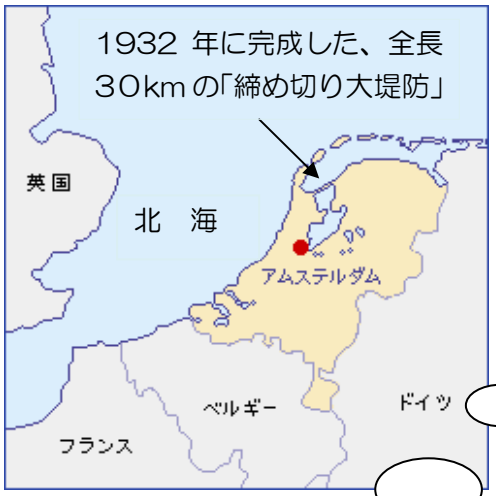
Koninkrijk　der　Nederlanden　　（オランダ語名）

Kingdom　of　the　Netherlands，　Holland（英語名）



「Nederlands」や「Netherlands」は、「低地の国」「低地地方」という意味です。「オランダ」は、ポルトガル語の「Holanda」から来ています。「Holland」というのは、アムステルダム周辺のホラント地方という意味で、オランダの中心部の地方名を指します。

○　**国旗の色と意味**
　16 世紀、スペインからの独立運動に使われた三色旗がもとになっています。現在の国旗は、1937 年に制定されました。上から、
・赤　～独立の戦いに臨んだ国民の勇気
・白　～神の祝福を願う信仰心
・青　～祖国への変わらぬ忠誠心
を表しています。



○　**位置**
　北緯 51 度～53 度に位置。サハリンの北部とほぼ同じ緯度にあります。高緯度のため、夏の夜は、11 時くらいまで明るく、冬は、朝の９時まっ暗です。

○　**面積**（４．２万平方 km）
　九州とほぼ同じ面積です。国土の４分の１が「海抜０m以下」（最高地点でも、322.5mです）にあり、昔から風車を利用して水をくみ上げ、それを運河に流して、土地を干拓してきました。1650 平方 km の耕地が新たに生まれました。

○　**気候**
　暖流の北大西洋海流の影響を受け、高緯度のわりには、温暖な気候です。
　夏の平均気温は 21 度前後、冬でも５，６度くらいで、めったに雪は降りません。

○　**人口　および　人口密度　（2009 年）**
　1653 万人　393 人/平方 km
　　（日本 337 人/平方 km）
　アムステルダム　約 73 万人

○　**在留邦人数**
　6616 人（2009 年 10 月現在、外務省統計）

○　**日系進出企業法人数**
　364 社（ヤマハ、日立、京セラ、日通、ヤマト運輸、島津製作所、キャノン、ヤクルト、アステラスス製薬、三菱自動車、ニッサン、Sony、EPSON、キッコーマン、富士フィルムなど）

800 年前から、海と戦ってきたオランダには、「世界は神が造ったが、オランダはオランダ人が造った。」ということわざがあるくらいです。現在、2400km 以上ある堤防と砂丘が、水害から国を守っています。

２　言語

オランダ語、フリースラント語（北部地方、40 万人の言語）

３　宗教

キリスト教（カトリック 30%、プロテスタント 19%、イスラム教４%、その他５%、無宗教 42%）

４　国民

ゲルマン系オランダ人　８３%、その他１７%（トルコ、モロッコ、スリナム、インドネシアなど）

５　政体

立憲君主制（ＥＵ加盟国）

６　元首

ベアトリクス女王

７　議会

２院制（第２院・下院　150 議席、第１院・上院　７５議席）

８　経済

＜主要産業＞　食品加工、金属、化学、電機製品、機材、薬品、天然ガス

＜主要農業＞　穀物、ジャガイモ、砂糖大根、果実、家畜類

＜主要輸出＞　機械、機材、薬品、燃料、食品

・日本でもなじみのある企業～ユニリーバ、フィリップス、ハイネケン、バンフォーデン

・球根の生産量は世界一。

９　略史と日本とのかかわり

年　月	略　　史
1568 年	対スペイン独立戦争
1648 年	オランダ連邦共和国独立
1810 年	フランスによる併合
1815 年	オランダ王国独立
1839 年	ベルギーの独立を承認
1867 年	ルクセンブルグの独立
1940 年	ドイツによる占領
1945 年	オランダ解放
1950 年	インドネシアの独立
1975 年	スリナムの独立

幕末には、欧米留学生として榎本武揚、津田真道などを派遣し、勝海舟がアメリカに渡った「咸臨丸」もオランダで造られました。明治時代には、デ・レイケやファン・ドールンなどを招き、日本の治水・潅漑事業で技術協力を得ました。

太平洋戦争では、日本軍がオランダ領東インド（現在のインドネシア）を占領し、４万人ものオランダ兵を捕虜として収容所に連行しました。この大戦による傷跡は、今でも二国間関係に影を落としています。

＜日本との交流＞

1600 年	デ・リーフデ（博愛）号が臼杵（大分）に到着
1609 年	オランダが平戸に商館を設置
1641 年	オランダの商館が出島に移転
1774 年	「解体新書」刊行
1823 年	シーボルト来日
1856 年	日蘭和親条約締結
1858 年	日蘭修好通商条約締結
1941 年	太平洋戦争始まる
1952 年	国交正常化
1971 年	昭和天皇がオランダをご訪問
1991 年	ベアトリクス女王が日本をご訪問
2000 年	天皇皇后両陛下がオランダをご訪問
2008 年	日蘭外交関係開設 150 周年
2009 年	日蘭通商 400 周年

10　オランダといえば

チューリップ、風車、チーズ、木靴の国
その他に、フットボール、スピードスケート
フィールド・ホッケー、自転車王国

オランダは、芸術大国
ゴッホ、レンブラント、フェルメール、エッシャー、ミッフィー（ナインチェ）が有名

その他、「安楽死、コーヒーショップでのマリファナ（大麻）などのソフトドラッグの事実上の容認、飾り窓地区の管理、同性愛者同士の結婚」などを耳にします。

しかし、誤解の無いように申し上げると、これらのことは、すべてが奨励されているわけではなく、今も見直しなど議論されているということです。

オランダという国は、単に「寛容な国」ということではありません。このような問題に対して、みんなで議論を尽くし合意を得るという道筋がはっきりした国といえます。少数派の意見も大切にし、たとえ少数であっても「反対」という意見も、堂々と表明できる素地があるのです。オランダが、早くから市民社会、民主主義が作り上げられ、「自分たちのことは、自分たちで決める。」という気質が長年に渡って醸成されてきた結果といえます。

オランダは、「ワーク・シェアリング」　発祥の地　～お金か時間か～

オランダに赴任当初、平日の午後に公園で子どもと遊ぶ父親の姿や、朝、子どもたちを学校へ送ったり、帰りに迎えに来たりしている父親の姿を目にすることがありました。日本ではあまり見かけない光景だったので「仕事は、どうしたのかな？」何てよく思ったものです。しかし、これがワーク・シェアリングで生み出されるライフ・スタイルの一つと気付かされました。夫婦二人で１．５人分働き、残りの時間を家族や自分の趣味のために使うというものです。2007 年のユニセフの調査では、オランダの子は、「世界一、幸福感を感じている子」という調査の結果が示されています。

しかし、そんなオランダも 1980 年代には、今の日本と同じように、不況下にありました。そんな折、政府と経営者労働者が話し合い、互いに痛み分けの形で合意したのが「ワッセナー合意」です。これを受け、10 年かけ、今のような労働形態が形成されたそうです。「フルタイム」も「パート」も「派遣社員」も「同一労働」＝「同一賃金」の考え方で、賃金の格差はありません。また、失業保険も収入の７０％を最長３年間保証され、仕事も派遣会社が探す義務があるそうです。こうした社会保障制度の充実が、ＥＵの中でも失業率の低さ（３．５％）にも表れています。（その分、税金は高いですが、、、）

教師も警察官もパートタイムの雇用形態があるというは、正直、驚きでした。小学校では、１クラスを二人で、２．５日ずつ担任するところもあります。

Ⅱ　オランダの教育について

1　オランダの「教育の三つの自由」

オランダでは、憲法 23 条の中で、「教育の三つの自由」が保障されています。この三つのことに、国は一切口を出しません。

設立の自由　　～200 人の子どもを集められれば、自分たちで学校を作ってもよい。
理念の自由　　～宗教色を出しても、他のことで特徴を出しても良い。
教育方法の自由　～教育内容、教材の裁量権が自由

など、「教育の自由の伝統」があります。

また、オランダの学校全体の４分の３以上は私立の学校ですが、公立も私立も国の援助は、まったく一緒です。学区はなく、保護者と子は、自分の行きたい学校を自由に選ぶことができます。

義務教育は、５歳から 16 歳までの 12 年間です。16 歳までの授業料は無料で、保護者はＰＴＡ会費のみの負担です。たいていの子は、４歳になった誕生日の日から学校へ行くことができます。中等教育のレベルでは、教科書とか教材を保護者が負担しなければなりません。所得とは、関係なく保護者には、児童手当が支給されます。

2　教育の多様性を最大限に認めたオランダの教育

公立学校の他に、宗教・主義学校があり、保護者や子はプロテスタント系、カトリック系、イスラム系、中立系などの選択ができるようになっています。モンテッソーリ教育、シュタイナー教育、ダルトン教育、フレイネ教育、イエナプラン教育など実に多様性に富んでいます。まさに、移民に対して寛容なオランダならではの教育制度になっているといえます。

＊　**全体の学校の１割を占めるオールタナティブスクール**

◯　モンテッソーリ教育　～　美しい教材とグループ学習、異年齢混合クラス・・・約２４０校
○　シュタイナー教育　　～　頭、心、手のバランスのとれた発達を目指す。
　　一定期間１つの科目に集中した期間授業・・・・・・・約　８０校
○　ダルトン教育　　～　子どもの課題を教員と児童の間で決め、子どもの自立的計画で学習する。子どの自主性と責任の強調・・・・・・・・・約２００校
○　フレイネ教育　　～　戸外授業、子どもの自由作文と新聞作りなどによる個性の重視。社会的尊重。子どもの自発的発見を起点とした授業・・約　１５校
○　イエナプラン教育　～　異年齢混合学級、サークル形式を重視。学習形式（サークル対話、遊び、仕事、催し）をリズミカルに循環させる時間割・約２２０校

3　オランダの学校制度（卒業資格がその上にある学校への入学進学の条件！）

オランダの子どもたちは、初等教育の終わる 12 歳（日本の小学６年生）にＣＩＴＯテストという全国共通学力テストを受けます。２月のはじめ３日間に受け、３月にこの成績と普段の成績を加味して、保護者と子どもと教師の三者で今後の進路を決めます。進む進路は、次の３つに分かれます。

12 歳で、将来の進路を決めるのは早いような気がしますが、中等学校へ入学後「ブリッジクラス」といって、改めて進路を決定する仕組みになっています。たいていの学校は、**ＶＷＯとＨＡＶＯがいっしょになった学校**が多いです。子どもの能力に応じて相互の学校を行き来することも可能です。

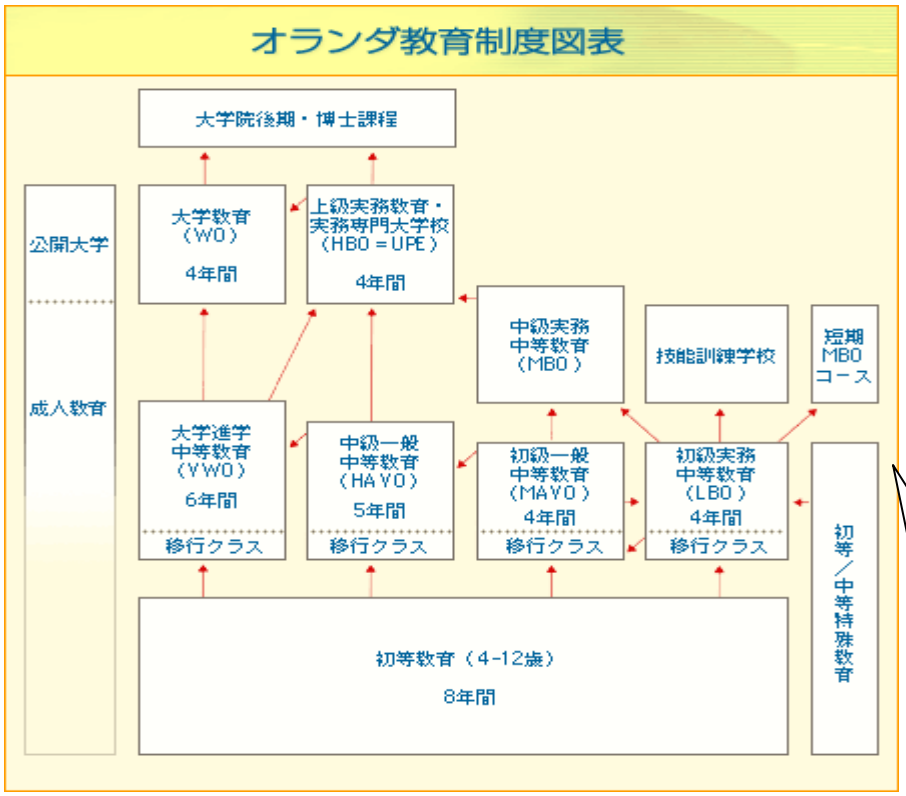
日本のように、塾も問題集もなく、オランダの子どもたちは、ありのままで試験に臨むそうです。

＜初等教育・小学校、卒業後の進路コース＞

☆ ＶＷＯ　（**大学進学コース**　６年間）～大学への進学率は、10％
　　「アテネウム・atheneum」「ギムナジウム・gymnasium」と呼ばれ、大学へ進むための準備をすることが目的です。

☆ ＨＡＶＯ（高校一般教育＝高等職業専門学校へ　５年間）さらに！
　→　ＨＢＯ～高等職業専門学校　４年間～小学校教師、看護師、技術者
☆ ＶＭＢＯ（中等職業準備学校　４年間）さらに！
　→　ＭＢＯ～中等職業専門学校　４年間～警察官、准看護師、美容師の資格など
　　ＬＢＯ～初等実務中等学校　４年間

ＣＩＴＯテスト
（Centraal Instituut Voor Toestsonwikkeling）
全国共通学力テスト（オランダ語、算数、学習スキル、一般知識～ワールドオリエンテーション/地理・歴史，生物、物理、市民科、宗教運動の教科で学んだ知識の応用）このテストは、義務ではありませんが、60%以上の学校が参加しているそうです



いずれの学校も、最終試験は、全国共通の卒業認定国家試験です！
オランダでは、卒業試験が上の学校への進学の資格になります。卒業試験に合格すると、上の学校を自由に選択できる仕組みになっています。　学校間の横滑りや編入学など、その子に応じた教育が可能な学校制度が特徴といえます。

＊　オランダの落第制度
子どもそれぞれの発達の程度の違いに対応して、「繰り返す」チャンスを与える制度。小学校の高学年になれば、20 人いるクラスに、３、４人は、落第経験者がいるのは普通だそうです。
中等教育では、24 人中６人くらいは、落第もあり。２年続けて落第の場合は、「お宅のお子さんは、本校の教育方針に合わないようなので、、、」と転校を進められるそうです。大学に入るのは比較的簡単なようですが、卒業するのはかなり難しいようです。

4　教育の質の保持
これだけ、多用な教育を実現したオランダの教育ですが、教育の質の保持は、どのようになされているのでしょうか？

☆　学校の選択権を保護者に与えること
学校の選択は、権利と同時に義務になっています。保護者が教育実践の援助を行う機会も非常に多いそうです。

☆　インスペクター制度（国の評価、点検機関）
各学校に目標を決めさせ、自己評価と自己改善のプロセスをそれぞれ学校は、どのように設定し、実施しているか監視する制度。
・「学校要覧」、「学校計画書（４年ごとに更新）」の提出
・「子どもの一人一人の進度記録」の提出

☆　教員サポート機関の充実

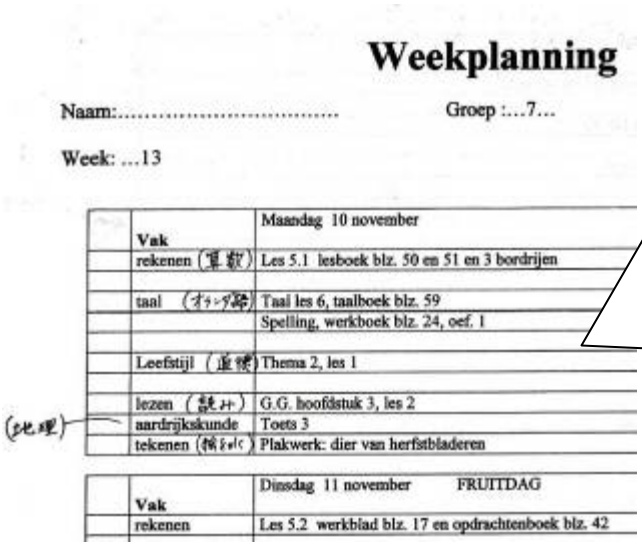
・生徒指導、学習指導などで現場の教師が困ったときに、助言・支援をしてくれる機関

・現場の教員と大学の研究者を結ぶサポート機関～現場に根ざした実践的研究

オランダの学校制度は、一人一人の子どもの個性を重視し、いずれは社会の中で自分はどういう役割（仕事）につこうか、時間をかけて選択できる制度になっています。そのまま、日本で受け入れるわけにはいきませんが、日本で最近言われている「キャリア教育」のあり方に示唆を与えてくれるような気がしました。一方で、移民に寛容である国であるため、イスラム系の移民や東欧諸国からの移民の経済格差からくる教育の格差の問題も、取りざたされています。いずれにしても、国と国民が一体となって論議をしている風潮が、「歴史的に早くから市民社会を形成してきたオランダらしいな。」と考えさせられました。

5　現地校（一般的な小学校）の視察研修から

これは、入り口を入ったところにある子どもたちのジャンバーかけです。一人ひとり袋に自分の着たものを入れているのは、「頭しらみ」がうつるのを防ぐためです。オランダでは、珍しいことではないようで、秋休みが終わってすぐのこの日も、一人の子が、廊下で「頭しらみ」のチェックを受けていました。



Weekplanning

Naam:.....　　Groep :...7...

Week: ...13

	Vak	Maandag 10 november
	rekenen（算数）	Les 5.1 lesboek blz. 50 en 51 en 3 bordrijen
	taal （オランダ語）	Taal les 6, taalboek blz. 59
		Spelling, werkboek blz. 24, oef. 1
	Leefstijl （道徳）	Thema 2, les 1
	lezen （読み）	G.G. hoofdstuk 3, les 2
(地理)	aardrijkskunde	Toets 3
	tekenen （絵画）	Plakwerk: dier van herfstbladeren

	Vak	Dinsdag 11 november　　FRUITDAG
	rekenen	Les 5.2 werkblad blz. 17 en opdrachtenboek blz. 42

これは、Grade7（5 年生）週時間割です。オランダの小学校で学ぶ教科は、国語（オランダ語のリーディング）、歴史・地理、算数、生物・科学、絵画・造形、音楽、体育、ライフスタイル（日本の学級活動、道徳の時間のような教科）があります。特に、興味深かったのは、交通（自転車の乗り方など）と言われる学習があることです。

教師は、クラスの一人一人の子どもたちの学習状況に合わせて、短いスパンで評価しながら個別に支援していくそうです。子どもの自主性を尊重し、その日のメニューは教師と相談して決めるそうです。

また、学習したことの定着度の確認は、日本と同じように単元テストを行っているそうです。定着していないと判断した場合は、extra instruction（補習）を時間内にするそうです。学習状況の進んでいる子には、別の課題を与え、ＰＣなどで学習を広げたり、深めたりしているそうです。

宿題は、学年に応じて出され、３年生からは宿題があるそうです。しかし、６年生でも週に１，２回程度だそうです。

～心や社会性を育てる～「Leef stijl = Life stile　学級活動　＋　道徳の時間」

日本の「学級活動」や「道徳の時間」にあたるもので、週１時間学習するそうです。
トイレの後に手を洗うこと、シャンプーの仕方など「健康に関すること」や買い物の仕方、友達とのかかわり方、友達を遊びに誘う方法など「対人関係や社会規範」を学ぶプログラムがあるそうです。

教育テレビを見ながら、学んでいる六年生

学習の進め方の一つの例は、教師と子どもでサークル状に座り、

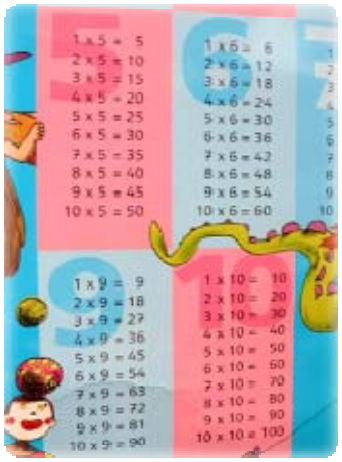
① テーマに沿って教師の話
② 小グループに分かれて論議
③ 話し合いの様子を全体で交流し、シェアリングする。

教師が、学習内容を一方的に話して終わるようなものではないそうです。
それぞれの学年の発達段階に合わせて、指導されているそうです。

10 時から、業間休み。おやつタイムです。この写真は、教室にあった棚の様子です。子どもたちは、家から持ってきたフルーツやジュースを飲みます。以前は、チョコレートやクッキーなど甘い物が多かったそうですが、最近は、肥満防止のため、くだものを持参する子が増えているそうです。
オランダ人は、体格がいい人種なので、予防医学の一環として小さいうちからの「食育」は、とても大切なことだと思いました。昼食もサンドイッチなど簡単なものが多いそうです。

＜個別に課題に取り組む３年生～みんな静かに、一人一人の学びの習慣が確立されています。＞

オランダの２年生の教室の「九九の学習の掲示」です。
日本の教室でも、昔はこんな表を張り出して、子どもたちの意欲を引き出しましたが、今はあまりやっていませんね。右の「九九表」は、日本の九九とは違い興味深いです。「かける数とかけられる数」が反対ですね。
問題練習をしながら、時々、九九表で確かめている子がいたのは、印象的でした。



Ⅲ　アムステルダム日本人学校

１　学校の概要（学校のＨＰは、www.jsa.nl です）

アムステルダム日本人学校は、開設当時の保護者と在蘭日本商工会議所をはじめとする多くの方々の努力と支援により、1979 年「オランダ日本人学校」として設立され、1984 年現在の校舎に至り、1992 年の「ロッテルダム日本人学校」の開設と共に、「アムステルダム日本人学校」と名称を変更し現在に至っています。

アムステルダム日本人学校の正面

スクールバス６台での下校風景

（１）児童・生徒数の変化

小学部　11 クラス（小６のみ１クラス）、中学部１クラスずつ　　計 14 クラス

年（平成）	２００３	２００６	２００７	２００８	２００９	２０１０
児童数	２４０	２０５	２０６	２２２	２０７	１６７
生徒数	６０	６４	６６	４９	４７	５７
合　計	３００	２６９	２７２	２７１	２７２	２２４

昨年秋のリーマンショックの影響を受け、オランダでも日本企業の撤退が相次ぎ、これに伴い駐在員の帰国が相次ぎ、児童・生徒数は減少傾向にあります。特に、若い駐在員の増加に伴い、低学年の児童の増加と中、高学年の児童は減少傾向にあります。

また、保護者の「英語熱」から、在勤期間が数年残っている家庭では、インターナショナルスクールへの転出が増え、これも児童・生徒数の減少に拍車をかけています。最近では、入学、転入してくる児童・生徒も多様化し、特別に支援や配慮を必要とする子や不登校など心の面でのサポートやインターからの転入による学習面での支援が必要な子が増えています。

進路・進学指導では、帰国後、ほとんどの子が、私立中、高校受験や公立学校を受験するため、小６、中３の担任は、きめ細かな指導が求められます。

（２）教職員の概要

北は北海道稚内市、南は沖縄県那覇市にいたる派遣教員 15 名、現地採用教員７名、オランダ語２人、英語講師４名、現地スタッフ５名の 33 名です。最近では、関東、関西の都市部から派遣される教員、30 歳前後の独身か妻帯で子どもなしの家庭が増えています。

（３）職員研修の概要

① 一人１授業公開、授業研究の実施
② 補習校支援（相互授業交流による研修）
③ 現地教育事情視察研修（現地校視察、教材展視察）

2　アムステルダム日本人学校の目指す教育

（１）日本人学校としての役割

・日本国内の学校と同一水準ないしはそれ以上の教育内容を保証する。
・児童生徒が帰国後も学習面や学校生活において不安がないようにする。
・日本人としてのアイデンティティを培う。（伝統文化への理解、知識・教養）
・国際性を養い、国際社会で活躍できる人材を育成する。

（２）保護者・日本人社会の期待

・児童生徒の安全・安心が第一に確保・保証された学校
・一人一人の子ども（我が子）が大切にされているという実感が伴う学校
・学習の質・量ともに国内の公立学校以上のものを保証する。
・基礎基本を確実に身につけさせるとともに、個に応じたきめ細かい指導をする。
・語学力（とくに英会話）の充実を図る。
・生徒指導、生活習慣の指導や教育相談、とりわけ進路相談の充実を図る。

（３）教育目標、校訓

○　児童生徒一人一人の可能性を伸ばし、明るい未来を創り出す国際人としての基盤を培い、オランダに生きる規律ある児童生徒を育成する。

校　　訓

○強く　　○明るく　　○豊かに

①　学びとる児童・生徒
②　思いやる児童・生徒
③　やりぬく児童・生徒

オランダ中の児童・生徒が集う合同運動会

3　アムステルダム日本人学校の特色

（１）　朝の読書活動

（２）　オランダ語の学習

・　小１～６年　週２回　１コマ 30 分

日常会話は、もとより、オランダの年中行事や現地校との交流、水泳学習、スケート教室時のオランダ語など、実際にオランダ語を使う場面を想定したカリキュラムになっています。

「女王の日」～オランダは、オレンジ一色
フリーマーケットの練習をオランダ語で

明治時代、日本の福島県の治水に貢献した
オランダ人ファン・ドールンさんの墓参り

（３）　英会話学習

- 小１～２年　週２回　１コマ 20 分　・小３年　週３回　１コマ 20 分
- 小４～６年　週４回　１コマ 30 分　・中学部　週４回　１コマ 50 分

（４）　現地理解教育

- 小１～小２　「生活科」　現地動物園、公園訪問、乗り物探検（トラム）

- 小３～小５　「総合的な学習の時間」国際理解
  ヨセフ校（現地校）との相互訪問による交流
- 小４　社会科副読本「わたしたちのオランダ」を使用した現地学習および
  社会見学（アムステルダム市内、運河クルーズ、風車博物館見学、

- 小５　日本企業訪問　～　日立建機、ニッサンキャリア
- 小６　現地校との交流（アウトファールト校　相互ホームスティ１泊２日）
- 中１，２年　現地校との交流（イグナチウス校、ザイスト校）

４年生　現地校ヨセフ校との交流
～日本の太鼓を紹介～

４年生　風車博物館見学

～オランダ人のパートナーに
習字で「友」を教えています。

４年生　毎年、クリマス恒例の　老人ホームを訪問　～歌やカードをプレゼント～

（５）オランダで楽しむ

アムステルダム日本人学校では、毎年、7 月に近くのプールへ水泳教室に出かけます。オランダの学校には、十分な広さの体育館は無いので、こうした市の施設を借りて、体育をする学校が多いようです。3 日間、240 名、およそ 3 時間でそのコーチ料は、何と 6500 ユーロ（約 86 万 4500 円）だそうです。子どもたちは、オランダ人のコーチから、その能力に応じて指導を受けます。日本とは違い「いかに体力を使わず、長く泳ぐか。また、水難からどのように身を守るか。」などを学びます。ですから、クロールや息継ぎの仕方を学び「速く泳ぐ」のではなく、背泳ぎや平泳ぎで「長く泳ぐ」ことを学びます。最終日には、「着衣泳」をマスターします。運河が多いオランダでは、水難事故で子どもが亡くなることのないように、小さいうちから、水泳教室へ通わせる親が多いそうです。

アムステルダム日本人学校では、3 学期に全学年で 3 回スケート教室があります。現地校との交流と同様に、オランダにいるからこそできる体験を子どもたちにもさせています。ほとんどの子が、関東から西の地域から来ていますが、すぐに上手になります。今年は、冬休み中に、運河で十分練習することができました。

指導は、スケート場専属のオランダ人のコーチから受けます。1 時間いっぱい滑り、子どもたちは、毎回、いい汗をかいています。北海道方式の汗取りタオルも教えてあげました。（背中にタオルを入れて滑る例の方法です）

Ⅳ　おわりに

帰国して、早 5 ヶ月経ち、ようやく日本のペースにも慣れてきました。それにしても、北海道は、こんなに暑かったでしょうか？

オランダ、アムステルダム日本人学校で勤務した 3 年間は、本当に貴重な経験をさせていただきました。教育熱心で学校に協力的な保護者、手をかければどこまでも伸びてゆく無限の可能性を秘めた子どもたち、また、全国各地から集まった教師集団、日本にいたときとは、また、ひと味違った職場を経験できたことは、わたしにとって、大切な宝物となりました。

生活の立ち上げでは、事務室をはじめとする現地スタッフの方々の温かいサポートで、スムーズにオランダの生活に馴染むことができました。

学校の授業はもとより、現地教育事情理解ということで、毎年、日曜参観日の次の日に、現地校を視察させていただいたことも、日本の外から「学校」、「教師」、「これまでの自分の仕事」を見つめ直す良い機会となりました。

「運河に映る建物や木々の美しさ」、「どこまでも広く、大きな白い雲がゆっくり流れる青空」、思わずカメラのシャッターを切ったこれらの風景は、わたしが感じたオランダの美しい風景です。

帰国後、2 年生の生活科の学習で、校区探検をしたとき「田んぼに移る山並みの美しさ」、「北海道の広くて青い空」に気づいたのです。「なあんだ、今までこんなに身近にあった風景なのに、自分は見過ごしていたんだな。」と。こんな経験もオランダでの 3 年間の生活があったからこそ、気づかされたのだと思います。

今の思いは、オランダは第二のふるさと、アムステルダム日本人学校は、単なる勤務校ではなく、「わが母校」という感じがします。

オランダで見たこと、聞いたこと、試したこと、オランダやオランダ人のすばらしいところや経験したことを少しでも目の前の子どもたちや大人に伝えていきたいと思います。そのことが 3 年間、わたしたちをその温かい懐へ抱いてくれたオランダという国、オランダ人への唯一の恩返しと思えるからです。また、派遣に当たっては、当会の先生方はもちろんのこと、多くの方々にお世話になって今の自分があることをいつまでも忘れずにいたいと思います。

7 月には、5，6 年生の子どもたちと「アンネの日記」を通して、「差別と平和について考える授業」を実践しました。わたしの 3 年間の派遣は終わりましたが、「ここが新たなスタート地点」と心に誓い、日々の実践をしていこうと思います。